

氏名	金 基煥
学位の種類	博士 (美術)
学位記番号	第 112 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目	地域固有の文化に根ざしたファイバーアート -韓国伝統のチップ (藁) 文化を基盤として-
審査委員	主査 教授 三橋 遵 教授 吉田 雅子 教授 日下部 雅生 ひろい のぶこ (本学名誉教授) 青野 卓司 (元・夙川学院短期大学教授)

## 論文の要旨

本研究の目的は、これまでのファイバーアートの歴史を検討し、それを再興する一つの方向として、地域固有の文化に根ざした作品制作のあり方とその可能性を提示することである。

本研究内容を大別すると、以下の 3 点となる。第一は、1962 年から 1995 年にかけてスイスで開催された「ローザンヌ・ビエンナーレ」の変遷を取り上げ、その問題点を踏まえて日本・韓国・中国における繊維芸術の流れや特徴を整理すること、そしてその上で、繊維を用いた造形の新たな展開の可能性について考察すること。第二は、韓国固有の文化である藁文化に着目し、藁という素材の特性やそれにまつわる儀礼文化、及びその中に育まれたさまざまな祈りについて考察すること。そして最後に、民族の中に継承されてきた藁文化にまつわる人間の祈りを、現代の造形によって提示し、ファイバーアートの新たな展開の可能性を示すことである。

第一のローザンヌ・ビエンナーレの変遷を調査した結果、以下の問題点が浮かび上がった。表現が多様化したため、かつてファイバーアートが立脚していた素材や技法などの基本条件が崩壊したこと、ビエンナーレの末期に参加していたアーティストの多くは、文化や伝統に対する意識が、初期のアーティストに比べるとかなり薄れていたことである。このような状況は、ローザンヌに触発された日本、韓国、中国のファイバーアーティストの多くにも該当する。このように、繊維という素材自体にあまり目を向けず、造形的なコンセプトを重視する志向が広まっている今日の中で、筆者は以下のような志向に今後の制作の可能性があるのでないかと考えた。すなわち、繊維にまつわる文化にもう一度目を向け、地域固有の文化に根ざした作品を制作することである。

そこで研究内容の第二として、筆者は韓国の藁文化にまつわる儀礼文化を調べ、それらに関連する 3 つの儀礼について現地調査を行った。それらはキジン綱引き祭り、ウェアムリ・チップル文化祭における葬礼儀式、ボンファサン・都党グッである。これらを調査した結果、以下を確認するこ

とができた。韓国において藁は農耕文化を象徴するもので、土地を意味し、また穂を抱いていた母胎であると捉えられること。そして大地から芽生え、無数の穂をのぼし、再び大地に還元される永遠不滅の循環性を持っていることである。さらに、藁に関わる文化に内包された人間の祈りの形や、その象徴性の意義や役割を見い出すことができた。

以上、ローザンヌ・ビネンナーレの変遷より捉えられるファイバーアートの課題、及び韓国の藁文化の再考を踏まえ、最終的に筆者は「祈り」を主題とした以下の5つの作品を制作した。(1)

「初プレゼント」は、命の誕生にまつわる祈りを主題とした作で、自分の子供のへその緒を切った体験をもとに、当時感じた感情を表現した。(2)「Not just yet」は、死にまつわる祈りを主題とした作で、サムドジョン(三途川)を渡る船をモチーフにした。死の世界へ導く不可知の力、人間の力では絶対に勝てないその力に抵抗しながら、現世に留まりたいという死者の気持を表現した。

(3)「Strawism」は、病にまつわる祈りを主題とした作で、癌の闘病中の義母の健康を祈って制作した。韓国のドルタブ(石塔)という祈りの対象物の姿を借り、藁紐をコイリング技法で一本一本巻く行為の中に自身の祈りを込めた。(4)「日々の祈り」は、記憶を守る祈りを主題とした作で、日記を書くように、一年間毎日一点ずつ作品を制作した。神聖な世界を示す左撚りのクムズル(しめ縄)に日常のモチーフを差し込むことで、その日の記憶を神に守ってほしいという願いを込めた。(5)「祈りの森」は、祈りの場所を主題とした作で、木が茂る森の風景を形象化した。作品中の円筒状の管は人間界と神界を連結する通路で、「都党グッ」のシャーマンと同じ役割を果たしている。

これらの作品制作において、筆者は以下の三つに力点をおいて制作を展開した。まず、藁という素材を使用することである。藁とその文化は先人たちの生活の一部であり、誇りをもって継承して行くべき伝統文化の一つである。次に、祈りを主題としたことである。祈りは人間だけが行う感情的行為である。地域や文化、宗教によって祈りの行為は千差万別であるが、その対象は喜怒哀楽や生老病死のように、常に人間に関わっている。最後に、自分の作品を民具や実用品ではなく、現代造形の一つとしてファイバーアートのジャンルに位置させることである。

今日の美術は様々な形で表現されている。所蔵されることによって価値を認められる作品がある一方、インスタレーション作品のように特定の場所に一定期間のみ存在し、後に痕跡を消すものもある。インスタレーション作品は場所と時間によってその姿を変化させるが、そのような在り方は藁が姿を変えながら循環してゆくことと近似している。反復的で連続的な特性をもつ藁、そして藁を取り巻く文化・思想は、自作の主題である生死観、生命の流転、命の再生、それらに関わる祈りと深く関係している。素材、作品形式、主題としての再生、回帰、そして反復と連続性をさらに深く探究してゆくことを、今後の課題としたい。

ローザンヌ・ビネンナーレの終息によって長い期間低迷していたファイバーアートは、北京国際繊維芸術ビネンナーレによって再び新たな展開の場を得ている。上述した課題に取り組みながら新しい造形的方向性を提示することが、ファイバーアートの新たな発展の原動力の一つになることを確信している。またこのような作品を制作することにより、今日急速に姿を消しつつある韓国の藁文化が、旧時代の古い遺物ではなく、韓国の貴重な誇るべき文化の一つであることを提示し、その流れを造形作品という形をとって継承してゆきたいと思う。

## 審査結果の要旨

### ■作品に関して

韓国伝統文化の中で「藁」に注目し、「キジシ綱引き祭り」、「ウェアムルジップル文化祭」、「烽火山都党グッ」など、現在でも続いている伝統的な儀礼、祭礼、風習などを現地取材し、その中から自らの制作と藁の関係を確認しつつ、作品へと展開してきている。本審査では、韓国の村の入り口に円錐形に積み上げられた石のドルタブから着想した「Strawism」と、鬱蒼とした森を形象化し、祈りの場を表現した「祈りの森」という2点の作品を展示した。いずれも博士課程在籍中に制作してきた作品であるが、本審査の展示ではそれぞれの大幅なボリュームアップをはかり、ふたつの単一の作品としての展示ではなく、2作品を融合させた藁による空間表現という形になっている。金氏の表現しようとする「祈り」のテーマをより充実させた作品展示となった。「祈りの森」もより奥行きのある空間になっており、ドルタブをモチーフにした「Strawism」の追加制作された2体のオブジェは、はじめの大きなオブジェとあわせ3体になって、空間を支配する力を有するようになり、「祈り」の場の象徴としての存在感を示し、その周りに林立する「祈りの森」の筒状の藁オブジェ群との関係を築いている。この筒状のオブジェは、非日常的の神聖で、宗教的なウエンセキで燃られている。2作が融合することにより、奥の神域へ鑑賞者は「祈りの森」に分け入り、祈りの対象である「Strawism」にたどり着く。この2作が融合した空間全体が「祈りの場」となったことにより、新たな作品世界を表出出来たことは高く評価できる。マグダレーナ・アバカノビッチやピーター&リッチー・ヤコビなどがそうであったようにその国固有の文化の中から作品が生まれ、金氏の言う「地域固有の文化に根ざした」という意味として、韓国におけるファイバーアートの可能性の実践的な試みとしても評価出来るものである。

今後の課題として、コイリング技法によってできた筒状の形状が、天と地をつなぐという意味性を考えるのであれば、最初から最後まで1本の燃られた藁縄で成立させるべきではなかったか。そうすることでより、意図的な造形にならず、藁文化に根ざした意味の整合性がより明確になるのではないか。など、展示空間の作り上げ方の熟慮がもう少し必要である。藁文化のみならず、自国での地域固有の文化の掘り起こしと新たな発見が今後の氏の制作により力強い土壌を作り上げ、韓国における新しいファイバーアートの地平を切り開いていくことが充分期待出来る。以上審査の結果、審査員全員一致で氏の作品制作は合格であると判定した。

### ■論文に関して

金氏の論文の主目的は、繊維を用いた芸術の流れを検討し、それを再興する一つの方向として、地域固有の文化に根ざした作品制作のあり方とその可能性を提示することにある。

まず第1章において、ファイバーアートに関して現在2つの見方が併存していることを展覧会記録をもとに提示した。ひとつはファイバーアートがすでに終わったという見方で、もう一つはそれが継承されており現在も続いているという見方である。金氏は後者の見解に立ち、ローザンヌ・ビエンナーレから北京ビエンナーレに至るファイバーアートの流れを取りまとめた結果、以下の問題点を指摘した。表現が多様化したため、かつてファイバーアートが立脚していた素材や技法などの

基本条件が崩壊したこと、ビエンナーレの末期に参加していたアーティストの多くは、初期のアーティストに比べると文化や伝統に対する意識がかなり薄れていたことである。このような状況は、ローザンヌに触発された日本・韓国・中国のファイバーアーティストの多くにも該当する。繊維という素材自体にあまり目を向けず、造形的なコンセプトを重視する志向が広まっている状況を金氏は指摘し、繊維にまつわる文化にもう一度目を向けて地域固有の文化に根ざした作品を制作することに、繊維を用いた造形の展開の可能性の一つがあり、その延長線上に自らの立ち位置を求めたいと考えた。そこで金氏が着目したのは、韓国伝統の藁工芸である。

第2章では、韓国の藁工芸の起源、社会的背景、歴史的展開にふれ、縄の撚り方を分類し、藁の素材としての特性やその中に育まれて来た人々の祈りについて、主に文献に依拠しながら叙述している。続く第3章では、藁を用いた儀礼を韓国で現地調査し、キジン綱引き祭り、ウェアムリ・チップル文化祭の葬礼、ボンファサン・都党グッに関して報告し、大地から芽生えて無数の穂をのばした後に再び大地に還元される藁は、永遠不滅の循環性を有しており、その文化には生病老死を初めとする多様な局面における無数の人々の祈りが内包されている様子を考察している。

第4章では、ファイバーアートの課題や韓国藁文化の特質を踏まえた上で、生死観・生命の流転・命の再生・それらに関わる祈りを主題とする、藁を用いた自作について語っている。5つの作品の諸特徴を、藁や祈りとの関係性を中心に解説している。場所と時間によって姿を変え、特定の場所に一定期間のみ存在した後に痕跡を消してしまうインスタレーションと、姿を変えながら循環してゆく藁の近似性にも言及している。

以上のような一連の省察を経た後に、民族に継承されてきた藁文化にまつわる人間の祈りを造形的に提示することによって、ファイバーアートの展開の可能性の一つが開かれてゆくことを金氏は確信し、急速に姿を消しつつある藁文化が韓国の誇るべき文化の一つであることを提示して、その流れを造形作品として継承してゆきたいと結んでいる。

このように本論は、制作の背後にある繊維を用いた造形の流れをとりまとめ、韓国で藁の祭礼の現地調査を行い、自身の制作の特徴とそれらとの関連性を語るものであり、制作と論文が密接に関連している。自らの作品の位置づけを考察するに際して、繊維を用いた造形芸術の流れを確認し、その中で自身の立ち位置や作品の在り方を考えるといった歴史性や時代性を含んだ省察が行われている点が、まず評価できる。

ヨーロッパでは、ローザンヌやウッジのビエンナーレ等に関する報告がまとめられている。日本においてはそれらの動向とともに、日本の展覧会や中国の繊維ビエンナーレに関する報告がなされている。しかし、欧州の動向とともに日本・韓国・中国の東アジア3国を加えて一連の流れを概観する見方がとられることはほとんどなかった。金氏は韓国語の文献を照査して母国の情勢を適確に取りまとめ、東アジア3国という視点をもってこれらの流れを概観した。この点は高く評価して良いであろう。

韓国の藁文化に注目した金氏は、作図を行ったり、時にはモデルを制作するなどして惜しみなく努力し、ともすれば理解しにくい各種の藁加工技法を明瞭に説明することに成功している。

さらに、技法的側面のみならず、文化的・宗教的意味合いに光を当てながら考察した上で、その中に結実されている人間の祈りを、自身の制作につなげていった。

金氏は藁文化を検証するにあたり、祭礼における藁の使用とその背後にある民族文化との関係を、

自ら現地に赴いて造形作家の視点から記録して解説した。このように自身の身体を祭礼の現場において藁文化を考察したことも評価に値する。

このような金氏の論文には、改善点がいくつかある。欧米のローザンヌ関係の出版物は、作品の本質的問題よりも、全体的な動向や展覧会の盛衰に関わる内容が主体になっているため、金氏の記述はそれらの取りまとめが中心になっている。将来は、作家やその作品が抱えた問題にさらに深く踏み込んでゆくことが望まれる。また、ローザンヌだけでなく、ポーランドのウッジや日本の ITF 等も幅広く視野に入れると、論述がさらに多角的になるであろう。

自作を語る章においては、即物的な説明に終わる部分が散見されることが惜しまれる。祈りと造形、藁の中に隠された精神性と造形性に関して、自分自身を見つめながらさらに丁寧に言葉を選んで語ってゆくと、本論はさらに充実したものとなるだろう。

金氏の論文は、このように改善点がいくつかあるものの、それに余りある価値がある。特に、本論の核となっている祈りの祭礼の現地調査の報告は、造形作家にしか書けない考察を含んだ貴重な記録となっており、また韓国において急速に滅びつつある藁文化を造形の世界において継承してゆこうとするその試みは、社会的にも意義深いものである。この論文は博士論文として一定の水準に達しており、審査員全員一致でこの論文は合格であると判定した。